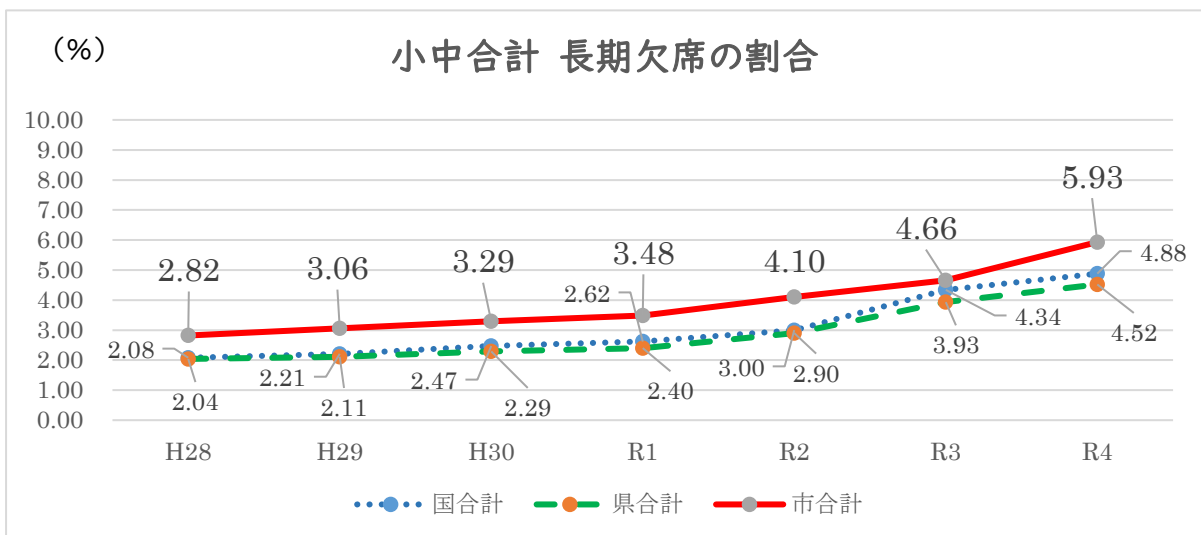
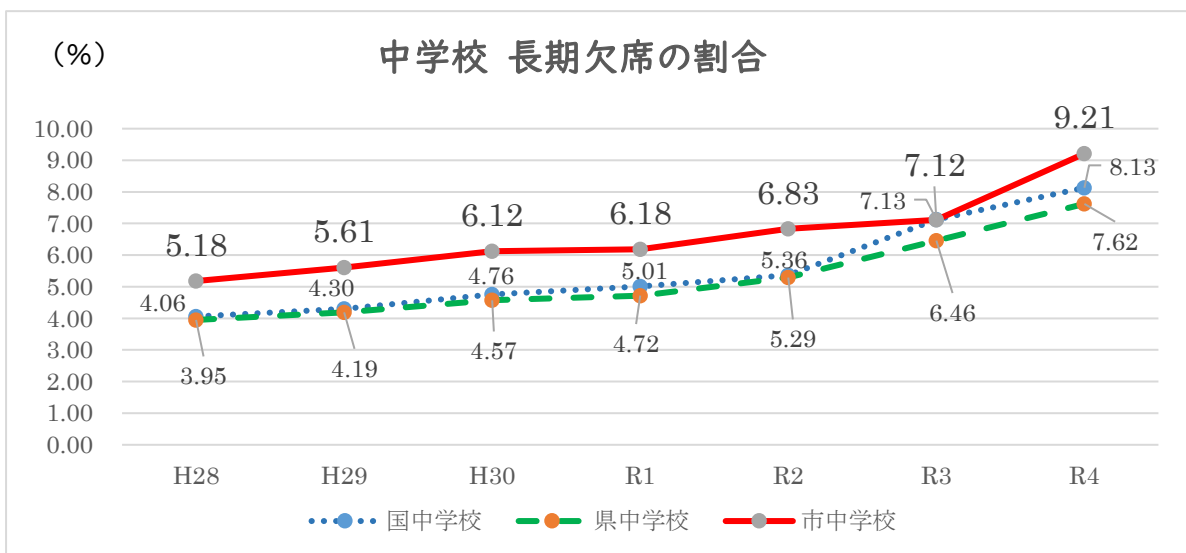
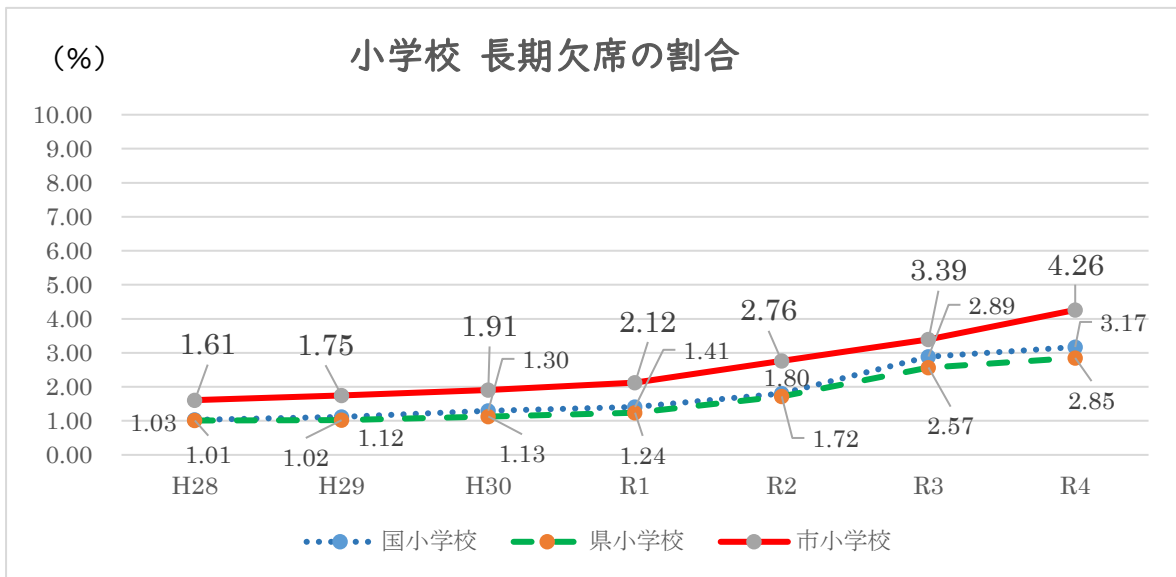
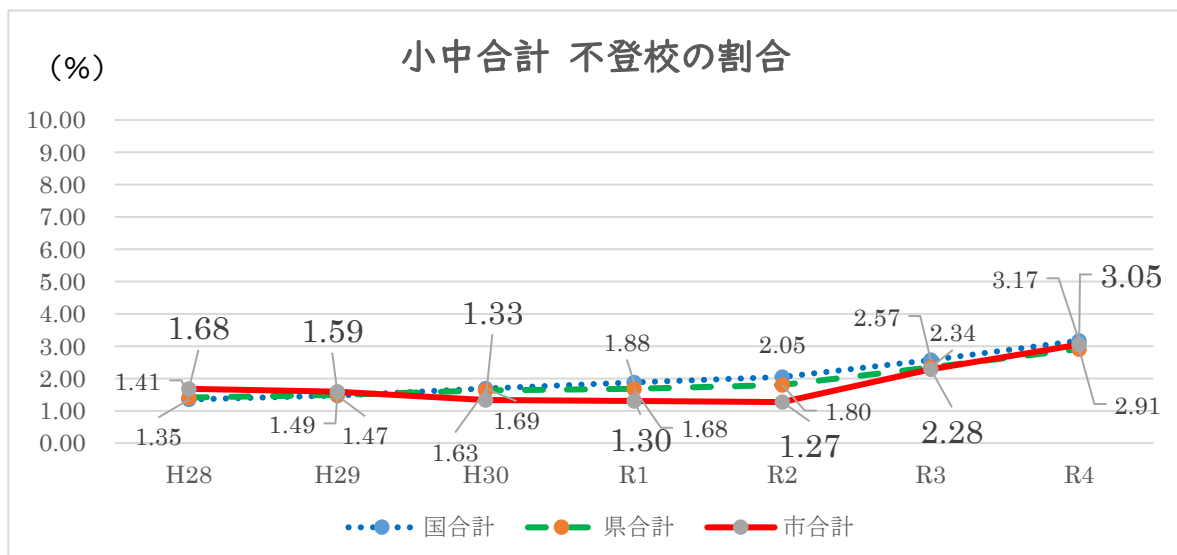
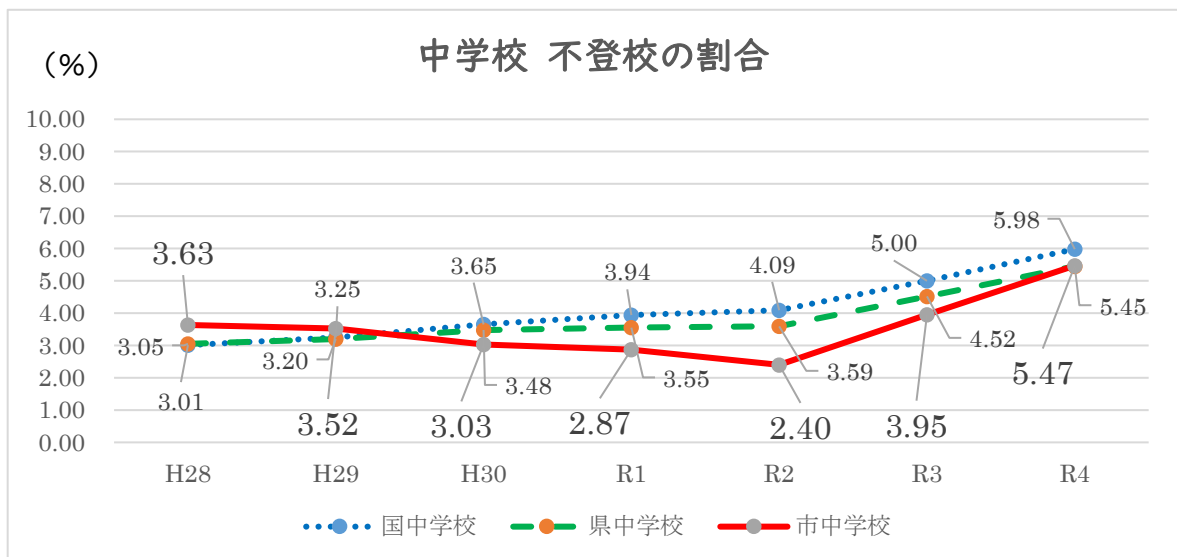
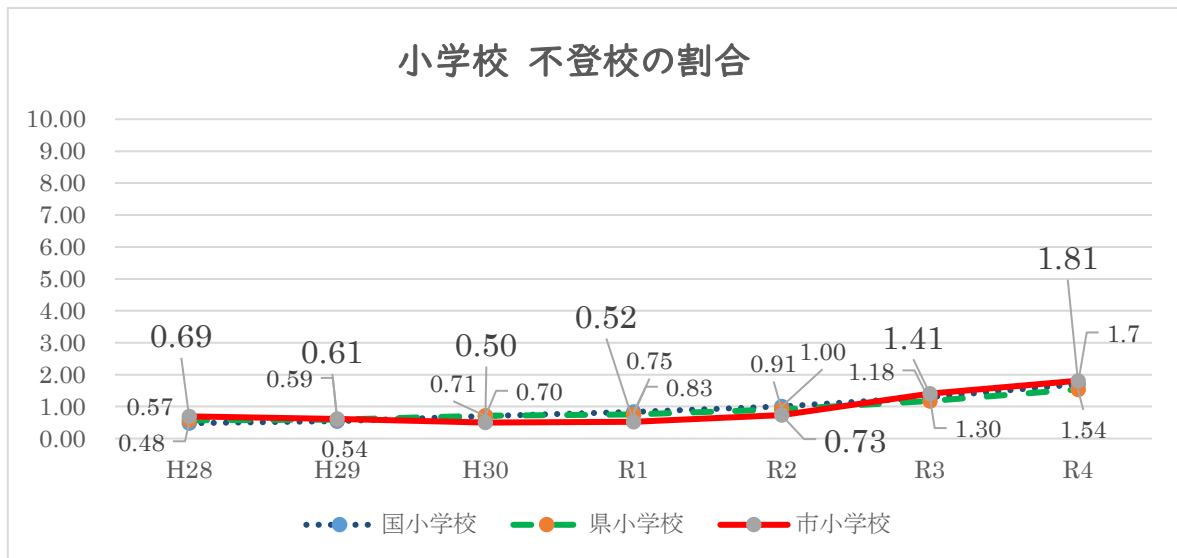


全児童生徒に占める長期欠席の割合(国・県・市比較)



全児童生徒に占める不登校の割合（国・県・市比較）



令和4年度の長期欠席の分析結果について

■全国的に長期欠席が大きく増加している中で、鈴鹿市も同じ傾向である。また、長期欠席の中を種類別に見ても「病気」・「不登校」・「その他」ともに増加している。

【長期欠席が増えた理由(共通)】

- ◆コロナ禍で、マスク生活を余儀なくされたり、直接かかわる行事が減らされたりしたことで、本来、子どもたち同士の関わりの中で育成されるはずのコミュニケーション力や人間関係を構築する力などが低下したためと考えられる。
- ◆親子関係が上手く築けていないことや、両親の関係など家庭環境の影響があるケースも多い。
- ◆少しの体調不良でも休ませるという家庭が増えてきたことも要因であると考えられる。

【本市特有の増加要因】

- ◆外国人児童生徒の在籍数が多く、長期欠席に占める外国人児童生徒の割合も高い。
- ◆特に小学校における外国人児童の長期欠席の割合は、全体に対して、令和3年度20.7%であったのが、令和4年度24.0%と増加しており、市内の小学校全体の長期欠席の割合が増えている要因と言える。
- ◆鈴鹿市における長期欠席の理由の「その他」について
小学校 令和3年度62件（うち一時帰国8件）、令和4年度91件（うち一時帰国23件）
中学校 令和3年度45件（うち一時帰国8件）、令和4年度34件（うち一時帰国6件）
- ◆小学校では、「その他」が増えており、一時帰国等を理由に休む外国人児童も増えている。
- ◆中学校では、一昨年度まで欠席日数29日以内で持ち堪えていた状況に変化が見られ、令和4年度は欠席日数が30日～60日の生徒が増えたことにより、市内の中学校全体としての長期欠席の割合が増えたと考えられる。（その内の約47%が新規に長期欠席対象者となった生徒）

【ほっとルームの成果】

- ◆ある小学校では、ほっとルームを今年7月に設置したところ、ほっとルームを活用している児童13人中7人の欠席率が下がっている。
- ◆校内に安心できる居場所ができたことで、登校できる日数が増えている児童がたくさんおり、成果として表れている。

今後に向けて

- 新たな不登校を生まないために、学校長の強いリーダーシップの下、学校全体で組織的・継続的に指導方法の工夫・改善に取り組むとともに、「魅力ある学校づくり」、「わかる楽しい授業づくり」に取り組んでいく。
- 小学校では、ほっとルームの設置による欠席率の変化を考察しつつ、きめ細かい支援を継続していく。
- 中学校では、各校の不登校生徒数等の状況を鑑みて、メリハリの利いた不登校対策教育支援員の人的配置に努め、校内サポート教室のさらなる充実を図る。
- 新規の長期欠席者を生まないための取組として、適応指導教室（けやき・さつき教室）に補助員を任用し、適応指導教室のスタッフが各小中学校にアウトリーチに行く体制を整える。
- 適切な不登校支援につなげるために、特別支援教育の視点から、児童生徒理解のための研修の充実を図り、教職員の意識付けを強化していく。